



伝統建築から西洋モダン建築まで
さまざまな建物の顔があり
特定の時代や様式に統一せず
それぞれの建物が輝く町
そんな木之本の町並みをご堪能ください。

きのもと町並み研究会

きのもと 町並み研究会の紹介

「きのもと町並み研究会」は木之本の町並みを掘り起こすため、平成26年（2014）に発足しました。町屋調査や町歩き活動などを通じて、木之本の町並みを発信しています。



発行日：2025年5月1日
発行元：きのもと町並み研究会
デザイン：植田佳美（MEDIART）
ポスター写真：辻井昌代

※観光WEBサイト
「きものとツゴ」



FREE

02 海津邸



明治初期の建築。20・21と同じく、かつては茅葺屋根の妻入住宅。折り畳み式の陳列台「ばったり床几」、柱から突出した装飾「持送り」、町屋のショーウィンドウ「出格子」がみどころ。

04 山路酒造



昭和3年（1928）に主屋を再建。木之本本宿の旧脇本陣。天文元年（1532）創業の造り酒屋。出格子、大きなガラスを使った引き戸、ケヤキ材のL字カウンターなど、伝統と近代が融合した建物。

07 文室邸（屋号 善左衛門）



明治8年（1875）に建築。江戸時代は庄屋、貸布団屋を営む。庇の軒先から垂れ下がる「幕板」は店先や客に雨水があたらないための工夫。街道から裏まで抜ける通り土間は、通風と彩光を兼ねる仕様。

09 文室邸（屋号 かしや）



明治後期の建築。かつては呉服屋、信用金庫として使用。屋根瓦には、屋根に積もった雪が道路に落ちないように、瓦に突起のついた「雪止め瓦」が使われている。木之本の町屋では一般的。

10 上阪邸



弘化4年（1847）に建築。旧上阪家の庄屋住宅で、間口の広い大型町屋。建築当時の外観がよく保たれている。2階手前に当初から居室を設けており、2階が居室化した時期を示す指標の建築。

12 木之本地蔵院



本堂は宝暦5年（1755）に再建。本尊は地藏菩薩（秘仏）。境内には本尊の写しである高さ約6mの日本一大きな地藏菩薩銅像がある。古くより延命息災・眼の仏様として信仰され御成壇巡りもできる。

15 本陣薬局



延享元年（1744）の大火直後に再建。江戸時代は木之本本宿の本陣を勤め、明治以降は薬局を営む。18世紀前半の本陣遺構を残す木之本宿最古の大型町屋。玄関先にかかる薬の木製看板がみどころ。

17 明楽寺



鎌倉初期に創建された真宗大谷派の寺院。本堂は江戸中期に建築。本堂や庫裡など6件が登録有形文化財。本堂は入母屋造の棧瓦葺き。内部には装飾的で広大な空間が広がる。

19 白木屋醤油



江戸末期の建築。天保年間（1830年代）より醤油醸造業を営む。主屋の裏手には長く連なった作業場や醤油蔵が今も残る。屋根が丸く盛りあがる「むくり屋根」がみられる。

20 重内



江戸末期の建築。かつては造り酒屋を営む。「重内」は屋号。02・21と同じく、かつては茅葺の妻入家屋がならんでいた江戸期の木之本宿の名残をとどめている。

21 菊屋

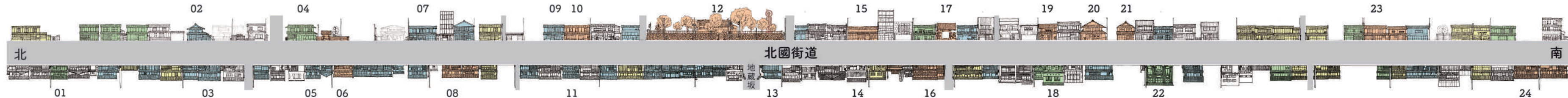


江戸末期の建築。大正期に改築。かつては「菊屋呉服店」として古着商・古物商を営む。2階の窓が大きく、大正期の特徴を現わしている。三角面（破風）が街道に面する妻入の建物。

23 岩根醤油



江戸末期の建築。大正13年（1924）に改築。明治後期から醤油醸造業を営む。玄関には明治期に使用していた5升詰めの醤油瓶が飾られている。玄関の先には、つるべのついた井戸が残る。



01 寺吉



昭和3年（1928）に建築。かつては建具店として営業。2階居室が高く、昭和初期の町屋らしい特徴を示す。店名の書かれているガラス戸は、表面にゆがみのあるレトロガラスが使われている。

03 馬宿平四郎



明治中期の建築。かつては旅籠といわれる。牛馬市時代の馬宿としての史料が多く残る。令和5年（2023）、動物墨絵師の佐藤周作氏が雨戸をキャンパスに馬の絵を描いた。

05 木之本塾



明治初期の建築。大正末期に台所と2階建の居室を増築。かつては「寺井金物店」として営業していた。現在は、手作り作品や伝統文芸・文化を発信するコミュニティの場となっている。

06 橋本邸



江戸末期の建築。大正4年（1915）に改築。琴・三味線などの邦楽器を製造する丸三ハシモトの元工房。家の高さが低く、江戸末期の町屋の特徴を現わしている。

08 望月邸



江戸末期の建築。かつては呉服屋とたばこ屋を営む。2階居室を設けるようになった先がけの建築。2階部分の黒壁は、戦時中に建物を目立たなくするよう、白漆喰を黒塗りにした名残。

11 Nanao pottery



明治8年（1875）に建築。昭和初期から末期まで「望月時計店」を営業していた。2階の窓枠は木製の姿をとどめており、美しいゆらぎのあるレトロ窓ガラスが使われている。

13 あたらしや



明治初期の建築とみられる。かつては「あたらしや洋品店」として、洋服・帽子を販売していた。江戸時代の高札場に由来する札の辻の石碑や、白漆喰の虫籠窓が特徴。

14 つるやパン本店



昭和34年（1959）に建築。昭和26年よりパン屋を営む。店内の天井には、2階の床板の裏面を1階の天井板として使用した、木材の交差が美しい「ささら天井」がみられる。

16 富田酒造



延享元年（1744）の大火直後に再建。「七本鎗」の銘柄で知られる造り酒屋。15とともに木之本宿で最も古い町屋。店内には魯山人が彫った扁額がある。3段に重なる大屋根がみどころ。

18 たばこや呉服店



昭和6年（1931）に建築。江戸中期よりたばこ屋・呉服屋を営む。「たばこや」は屋号。木造のモルタル作り。2階の窓と壁にはモダンな装飾が施された洋風古民家である。

22 きのもと交遊館



昭和10年（1935）に建築。湖北銀行（昭和17年からは滋賀銀行）木之本支店として、昭和60年まで利用された。イオニア式の円柱を持つモダン建築。江戸時代はここに木之本本宿の間屋が置かれた。

24 ダイコウ醤油



江戸末期の建築。主屋は明治中期に増築。嘉永5年（1852）より醤油醸造業を営む。正面に大きな醤油樽が3つ並ぶ。玄関正面付近に1、2階を貫く「通し柱」があり、耐雪を備えた木之本町屋の典型例。

・木之本

木之本は室町時代より木之本本地蔵（淨信寺）の門前町、北國街道の宿場町として栄えました。木之本の住宅は、農家風（余呉型民家）の妻入住宅と京町屋風の平入住宅が混在し、積雪にも耐えられる北国ならではの住宅様式を残します。木之本の町並みは、長浜と比べて、質素で少しひなびた風情が感じられます。木之本は江戸時代から昭和初期までの、さまざまなバリエーションの建物があり、農村家屋と京町屋の特徴が混じる、全国でも珍しい町並みです。

北國街道沿いの「建物」案内



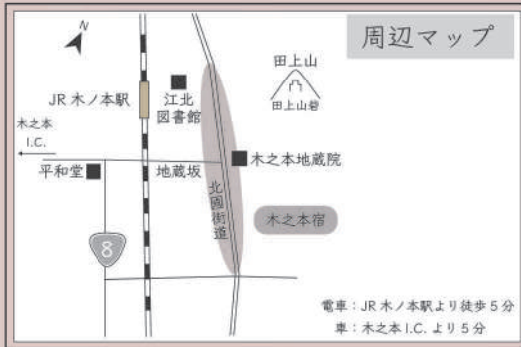
かつての宿場町・滋賀県長浜市木之本町

江戸時代 大正時代
明治時代 昭和初期

登録有形文化財

50年を経過した建物のうち、以下の①～③の中で1つ以上を満たす建物を、貴重な歴史的建造物として守り、地域の資産として活用するための文化庁の制度。

- ①地域に親しまれている建物
- ②時代の特色をよく表わす建物
- ③再び造ることができない建物



a 道路元標

木之本地蔵院の入口にある道路元標は、全国各地の要地間の距離を測る基準として、かつては各市町村に1基ずつ設置された。道路法改正に伴いその多くが消滅、長浜市内では木之本と塩津浜のみに残る。「伊香郡木之本町道路 元標」

d 木之本地蔵院のカエル

木之本地蔵院のカエルは片方の眼をつむっていると言われている。それは「世の中から眼の病が無くなりますように」とお地蔵様に願をかけているお姿。手水鉢に鎮座している大きなカエルが見どころ。



木之本「建物」検定！

b 鬼瓦

屋根の棟の端には、魔除けとして鬼の顔をした「鬼瓦」が置かれている。七福神を現した縁起のよいものも見かけられる。以前は、江戸時代の八幡瓦師（近江八幡市）の銘のある鬼瓦も使われていた。

e 「平入り」と「妻入り」

「平入り」は建物の平に正面入口を設けて正面とし、「妻入り」は建物の妻側に入口を設ける建築様式。「平」は建物の大棟に平行な側で、「妻」は屋根の側面の三角形の壁面。現在、妻入りの家は北國街道沿いの東側に4軒残っている。

g 家の高さ

2階の高さが低い建物は江戸～明治頃の建築物。家の高さでおおよその建築年代がわかる。

c 袖壁

「袖壁」は、防火や装飾を目的に、町家の2階部分の軒下両側に設けられた漆喰の壁のこと。帯や模様で装飾されており、いろいろな種類の袖壁がみつけれられる。木之本には大屋根の両端にのる「うだつ」のある建物はないが、袖壁のことを「うだつ」と呼ぶ人もいる。

f 地下水

木之本は田上山から伏流する良質な地下水に恵まれ、古くから酒・醤油などの醸造業が盛んである。現在でも多くの住民が生活用水として地下水を使用しており、道端には共同井戸が見かけられる。

h 道標

道標は、別れ道や交差点などに立っていて、旅行く人に道しるべの役目を果たしていた。「みぎ京いせみち ひだり江戸なごや道」

